



TITLE:

前立腺癌の陰茎転移例

AUTHOR(S):

加藤, 篤二; 岡田, 謙一郎

CITATION:

加藤, 篤二 ...[et al]. 前立腺癌の陰茎転移例. 泌尿器科紀要 1972, 18(11): 978-981

ISSUE DATE:

1972-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/121443>

RIGHT:

前立腺癌の陰茎転移例

京都大学医学部泌尿器科学教室

加 藤 篤 二

岡 田 謙 一 郎

CARCINOMA OF THE PROSTATE WITH METASTASIS
TO THE PENIS: REPORT OF A CASE

Tokuji KATO and Ken-ichiro OKADA

From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University

A 60-year-old man was admitted with dysuria. Biopsy of the prostate disclosed anaplastic adenocarcinoma of the prostate. Despite anti-androgenic treatment, metastasis to the penis developed with priapism. Autopsy also revealed metastases to the bony pelvis, liver and the lung.

はじめに

前立腺癌の経過中続発性に諸所に蔓延したが、とくに陰茎へ転移をきたした症例についてのべる。

症 例

患者：60才の男子，初診1971年1月28日。

主訴：排尿困難

既往症：特記すべきものはない。

現症：1970年の夏ごろより頻尿ととくに排尿困難を訴え，1971年1月28日に当科を受診して，前立腺生検の結果未分化型腺癌の診断を下され（Fig. 1, 2），入院して除睾術を施行，以後通院にて女性ホルモンの投与をうけていたが，1972年5月ごろから右股関節直上部の痛性腫脹に気づき漸次増大したため歩行困難となり，排尿も不自由で1972年6月7日再入院した。

所見：体格は中等度，栄養良好，胸部に異常なく，腹部は陥凹し，肝は2横指をふれるが表面は平滑で弾性硬，両腎はふれず，膀胱部に軽い圧痛を認める。ソケイ部リンパ節は腫脹せず。右腸骨前上棘を中心にびまん性の腫脹がみられ，軽い圧痛を呈する。外生殖器は除睾術後の状態のほか著変なく，前立腺は約鶏卵大で表面に凹凸があり，石様の硬さを示す。右下肢の屈曲，伸展にさいして股関節部の疼痛を覚え，起立歩行困難。

検査成績：血圧120/60，血沈値は1時間7mm，血液像は赤血球数 365×10^4 ，ヘマトクリット33%，血色

素 11.0 g/dl，白血球数 6500，生化学検査では軽度の低蛋白血症（総蛋白 6.0 g/dl）を示すほか肝・腎機能に異常はない。血清酸フォスファターゼ 0.9 キングアームストロング単位，前立腺性酸フォスファターゼは 0。レ線検査で胸部に異常なく，排泄性腎盂撮影で両腎とも排泄良好，単純撮影像で左右腸骨翼，右恥骨に造骨性の直径 1~3 cm の円形陰影を認め，右前上腸骨棘を中心に半径 5 cm の円形溶骨像をみる。尿道撮影で後部尿道は著明に延長，尿道前立腺部は左方へ圧排されている。尿はやや混濁し，蛋白（-），糖（-），白血球数コ，赤血球（-），上皮（+）。

経過：入院2週目の6月20日ごろより排尿困難が増強したため6月25日より留置カテーテル施行，7月4日右腸骨翼の溶骨部を試験切開するに浸潤腫瘍組織は出血性で，組織像は初診時の未分化型腺癌像とはやや異なり，大小不同のクロマチンに富む癌細胞が外骨膜下に集団をなし全く未分化癌の像を呈した（Fig. 3）。なお7月20日より上記右腸骨翼に ^{60}Co 照射（5000R）をおこなったところ腫脹はいくぶん縮小したが右下肢の疼痛と運動障害は依然強く，8月11日ごろには両肺野の下部に1コずつの小円形転移像を認めた。そのころより陰茎はしだいに腫大して硬度をまし，強直して勃起状態となり（Fig. 4），包皮のリンパ性うっ滞を伴うに至ったが亀頭に異常はない。試験切除では図のごとく，クロマチンに富んだ細胞が陰茎白膜下のリンパ腔に密集し，一部では細胞は円柱状形態をなすところ

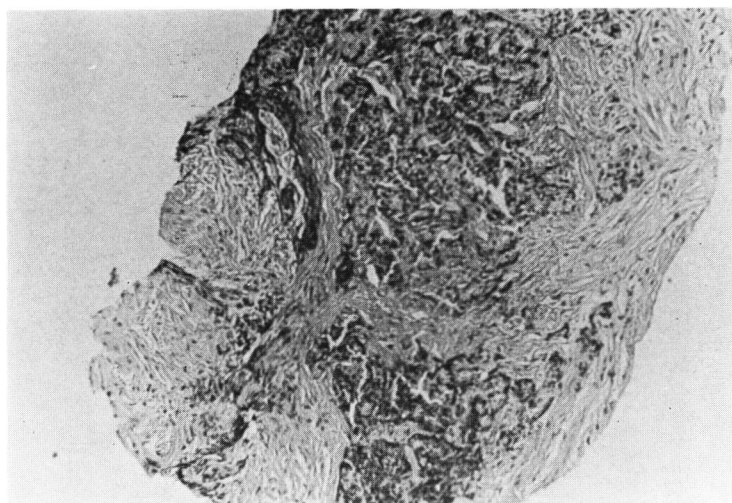


Fig. 1

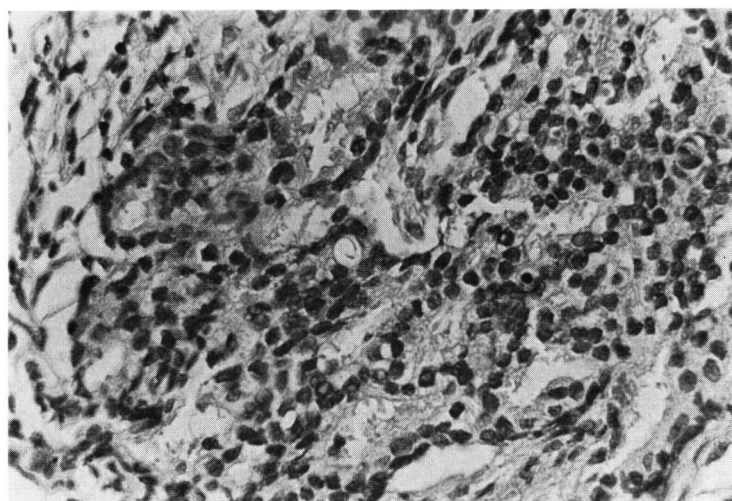


Fig. 2

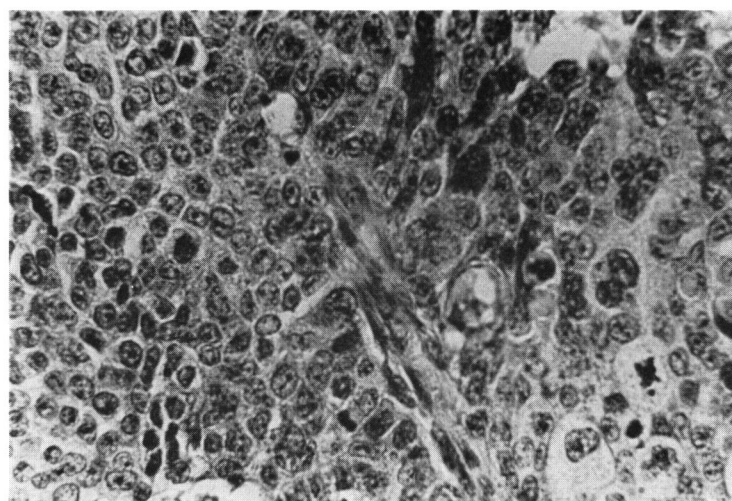


Fig. 3

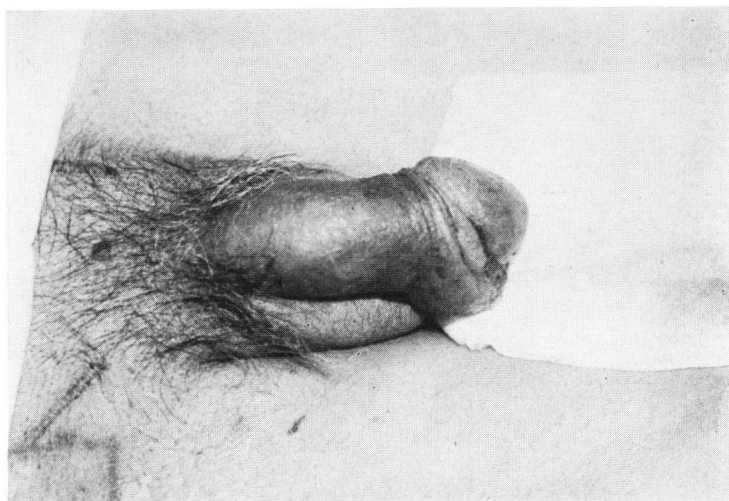


Fig. 4

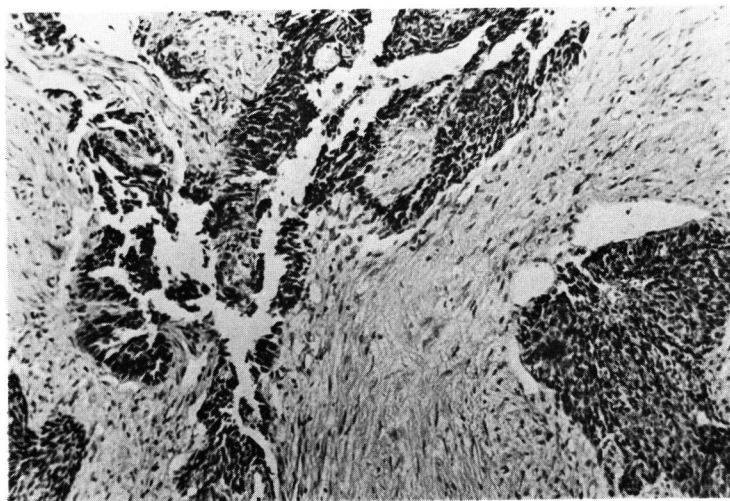


Fig. 5

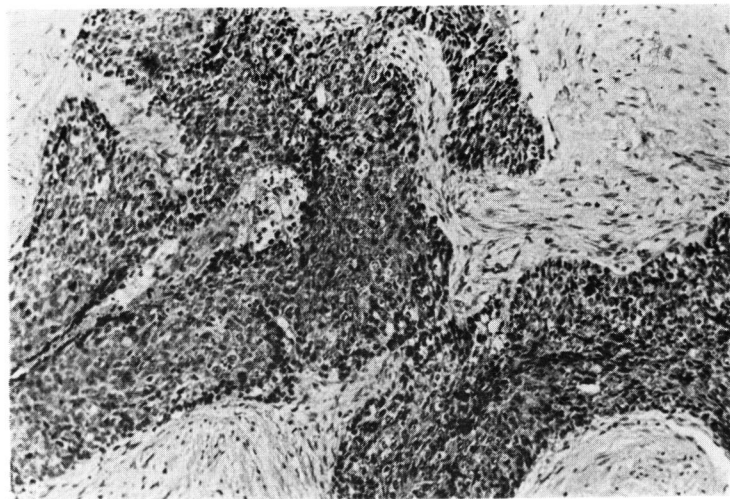


Fig. 6

もみられ (Fig. 5), また他方では未分化の単純癌様集団も認められた (Fig. 6). 治療としてエンドキサンと 5FU の抗癌剤が投与されたにもかかわらず10月5日高熱と呼吸困難をきたし, 胸部レ線像で播種性転移が考えられ, 肝は4横指まで腫脹, 10月8日死亡した. 剖検所見は前立腺癌の膀胱三角部への浸潤, 陰茎海綿体への広範な浸潤, 腸骨右前上棘を中心に超手拳大の溶骨性転移と右恥骨櫛の造骨性転移, 左ソケイ部の母指頭大転移のほか肝は重量 3 kg, びまん性に大豆大より鶏卵大の播種状転移, 肺は両側のとくに肋膜面に近くあつき大ないし米粒大の無数の結節がみられ, そのほか傍気管支, 傍大動脈に数コのリンパ節腫大があった.

ま と め

以上より本症例は未分化腺癌で約1年9カ月間の抗男性ホルモン療法にもかかわらず骨転移をきたし, そのご蔓延して肺, 肝にもおよび陰茎が priapism の状態となり, ついに死の転帰をとったもので, 剖検所見と臨床像とがほぼ合致していた.

さて問題の陰茎転移であるが, Abeshouse, Kaufman らの外国統計では前立腺由来のものが多くが,

本邦ではきわめて少なく, 国分らの29才の前立腺単純癌症例と, 仁平らの65才の腺癌の2例のみである. 転移経路としては原発巣よりの連続的な浸潤性の拡大と循環障害による逆行性リンパ転移が最も考えられる. 持続勃起症は一般に白血病または特発性起原が多いのに比してこのように腫瘍によるものは意外に少ない. いずれにしても原疾患の末期にみられるもので, 予後の短いことを物語るが, 本例で前立腺癌の転移状況として最も多い骨系統, 肺, 肝などのほか比較的少ないとされたソケイ部リンパ節および陰茎に認められたことは珍しいのでここに記載した.

主 要 文 献

- 1) Abeshouse, B. S. and Abeshouse, G. A.: J. Urol., **86**: 99, 1961.
- 2) Kaufman, J. J. and Kaplan, L.: Arch. Surg., **73**: 105, 1956.
- 3) 国分・小谷: 日泌尿会誌, **40**: 5, 1949.
- 4) 仁平・中川: 泌尿紀要, **8**: 116, 1962.
- 5) 大越: 持続勃起症, 泌尿器科新書, 南江堂発行.
(1972年10月16日超特別掲載受付)

最新刊

Hans Boeminghaus

Urologie I, II

Operative Therapie-Indikation-Klinik

1142ページ, 663図, DM 295.

Werk-Verlag

Dr. Edmund Banaschewski

München Gräfelfing